



Title	自然災害と震災復興の経験をグローバルに共有する
Author(s)	葛西, 賢太
Citation	宗教と社会貢献. 2012, 2(1), p. 61-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/19014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自然災害と震災復興の経験をグローバルに共有する

葛西賢太*

KASAI Kenta

1. 再掲にあたって

以下は、「自然災害と震災復興の経験をサウディアラビアの友人と共有する」と題して、『日本サウディアラビア協会報』に寄稿された拙稿であり、『協会報』がオンライン媒体を現時点で持たないことから、同協会および『宗教と社会貢献』編集委員会のご好意によって『宗教と社会貢献』誌に再掲されるものである。

サウディアラビアの国名の日本語表記については、「サウディアラビア」の表記と、日本で広く用いられている「サウジアラビア」の表記とが並存している。筆者は通常、後者を用いているが、寄稿にあたっては『協会報』のタイトルにあわせて前者を用いた。したがって本稿では二つの表記があえて並存されている。『宗教と社会貢献』投稿規定に沿い書式を改め、参考文献とこの「再掲にあたって」を付したほかは、文章および写真には手を加えていない。

本事業においては、東日本大震災に震災を限定せず、阪神淡路大震災やそれ以前の災害、その後の16年間に日本国内含む世界各地で生じた大小の自然災害にも目配りしながら、自然科学的側面に加えて衣食住などの文化・精神的課題に焦点を当てた。人間は忘却する生き物である——東日本大震災は、「未曾有」の震災と呼ばれもしたが、吉村昭『三陸海岸大津波』に語られるように、幾度も大災害を経験しながらそのたびに学び直し続けなければならない人間のさがは、普遍的な課題ともいえる。自然災害の被害という点では、事情は地域により異なるものの、サウジアラビアも含めた全世界が関心を共有している⁽¹⁾。災害の痛みを分かち合うことをきっかけとしてはじまる交流というのもありうるのだと再認識した。

『協会報』の読者にとっては自明のことでも、『宗教と社会貢献』読者

* 宗教情報センター・研究員 ktkasai@nifty.com

はもう少しこの国について情報が欲しいことがあるだろう。日本からの渡航が容易でないことも、サウジアラビアという国において型にはまった情報提示が多く流布することにつながっている。わかりやすさを標榜するジャーナリストが、逆に型にはまった説明に陥ってしまうことも多い。そのため、参考文献には、公的機関から公開されている基本情報と、生活文化面を多く捉えている *Asahi* 中東マガジンへのリンクを加えた。

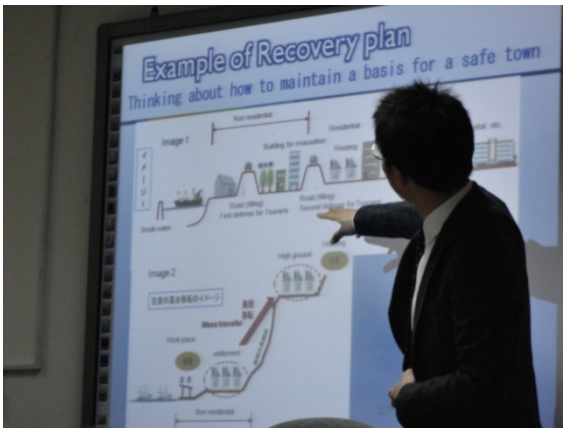
私たちの渡航は国際交流基金の事業であるが、企画の早期から、在リヤド日本大使館の高尾賢一郎専門調査員に、現地協力機関との連絡などにご尽力いただいた。また現地においては、同大使館のネットワーク、高知県立大学の辻上奈美江講師のネットワークがなければ、リヤドの街を縦横に巡る活動はかなわなかった。改めて謝意を表明したい。

拙稿が、サウジアラビアという遠い国との国交や共同事業に尽力されている両国の尊敬すべき人々を理解する一助ともなれば、筆者としてはうれしい限りである。

長い前置きとなったが、以下が、『日本サウディアラビア協会報』掲載の拙稿である。

2. なぜサウディアラビアに？

日本人の多くにとって、サウディアラビアという国は、石油の供給元（日



津波の届かぬ高さにコミュニティを移すプランを紹介（山口氏スライド）

本が消費する 3 割はサウディ由来）というイメージが圧倒的だ。メッカとメディナの聖地を擁し、厳格なワッハーブ派のイスラームを是としているとはどういうことか、熟知しているのは、宗教事情や文化事情に詳しい人、あるいは、実際にサウディアラビアを訪れたことのある人だろう。自動車

や精密機器などの買い手でもあり、技術供与のための交流も多くなっているが、石油や工業製品以外のモノとヒトの往来はあまり認識されていない。

2012 年 2 月、私たちは、国際交流基金の事業として、「自然災害と震災復興の経験をサウディアラビアの友人と共有する」ために、リヤドを訪れた。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災について、国内で語られる機会はたくさんあるのに、なぜサウディアラビアで、と問われるたびに、私は答えてきた。

「サウディアラビアも自然災害と無縁ではない、2009 年と 2011 年にはジェッダで大洪水を経験し、防災と災害復興の重要性を痛感している、そして、自然災害への対策は人類共通の課題である」と説明している。

今回の目的は、(1)自然災害と震災復興の経験・知恵を、ジェッダの洪水



仮設住宅で使用されているアラムコ社供与の LP ガス(山口氏スライド)

を経験したサウディアラビアの友人と共有すること、(2)東日本大震災後のアラムコ社からの 2000 万ドル相当の LP ガス供与など、王国からの公私両面の支援に対する感謝表明であった⁽²⁾。5 人の渡航者のうち、代表者の葛西と辻上奈美江氏（高知県立大学）は、2011 年にサウディアラビア政府からジャナドリヤ祭にご招待いただいた

返礼も兼ねていた。在リヤド日本大使館と、同じくリヤドにあるグローバル大学（Global College）との二箇所で開催は行われた。この目的は達成でき、また、それ以外のすばらしい方々との交流の機会も得られた。

3. 経験と知恵を共有する

私たちがサウディの友人たちと共有した内容を、かいつまんで紹介したい。

私・葛西は宗教学者である。経験・知恵の共有と、感謝表明のための訪サという目的を説明した。日本人は今回の震災のみならずしばしば自然災害を経験しており、災害のためのさまざまな備えを行っているが、その一方、忘却や見落とし、見逃しも多い。したがっ

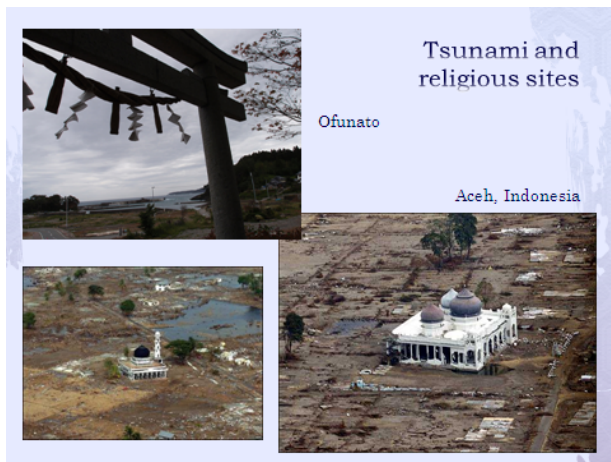
て、経験と知恵を繰り返し伝えることの大切さを語り、日本のボランティアが獲得した知恵を紹介した。

航空測定の専門家である山口直樹氏（アジア航測）は、東日本大震災からの復興事業に関わる貴重なデータをふんだんに用いながら、今回の津波が、これまでの想定・対策を上回る大きなものであったこと、今回の経験を踏まえて、コミュニティの移住も含んだ長期的な復興計画がどのように進められているかをビジュアルかつ具体的に語り、質問も多く、好評であった。

精神科医の森村安史氏（仁明会精神衛生研究所）は、1995 年の阪神淡路大震災も経験した立場から、PTSD（心的外傷後ストレス障害）について、また災害時のコミュニティ安寧維持の意義について、さらに、各国の災害支援経験から WHO が包括した知見（IASC のレポート）について、アラビア語版も入手可能であることを強調して紹介した⁽³⁾。グローバル大学の医学生たちは、この報告は励みになったと口々に述べ、私たち皆が力づけられた。森村は終了後にリヤドの精神病院を表敬訪問し、2 月 13 日付のアルリヤド紙に記事が掲載された⁽⁴⁾。



ボランティアたちを混乱させない知恵(葛西スライド)



人々を結びつける宗教の力(見市氏スライド)

重要性を指摘した。アチェにおいても津波に耐えたモスクが象徴的な復興の力になったことをあげ、震災後の東北における地域文化の力について述べた。

辻上氏はサウディアラビアの比較ジェンダー論を研究する社会学者である⁽⁵⁾。アブドラ国王奨学金などで300人のサウディ学生が日本で学んでいる現状、サウディの複数の大学で日本語の教育が推進されていること、2011年のジャナドリヤ祭日本特集や人気番組「ハワーテル」での日本への関心などを例に挙げ、日サ間のこれまでのギブアンドテイクの経済的技術的交流に加えて、文化的・人的交流を展開する時代であることを示した。サウディ文化が男女の生活空間をきちんとわけることに言及し、日本の震災後の避難所で男女が狭いスペースにひしめき合っている写真から、災害に備えることの重要性を考えさせた。

4. 人と人の交流

上記講演の他、今回の訪問においては、王立ファイサル研究センターと、王立アブドゥルアージズ国民対話センター(Wafa Hamad Al-Tuwaijre 博士に面会)などの研究機関を表敬訪問、日サ間での知恵と経験を共有する意義

インドネシア政治を研究する見市建氏(岩手県立大学)は、スマトラ沖地震に伴うアチェの津波被害やジャワ島中部地震に接し、支援活動にも関わってきた。東日本大震災では被災学生の支援や民俗芸能の担い手と関わりながら、技術的な知識だけでなく、人々を結びつけ力づける文化の重

を再確認した。また、聴衆との会食の機会なども持って、多様な交流を行



った。

今回の訪問を可能にした国際交流基金および在リヤド日本大使館の皆様
に特に感謝申し上げたい。

多彩な聴衆。グローバル大学にて

註

- (1) 震災の経験を広く語り共有するというプロジェクトはいくつも行われている。オンラインでアクセス可能な例をいくつか挙げるなら、たとえば、グーグルが提供している「未来へのキオク」(<http://www.miraikioku.com/>)、日本研究の拠点として知られるハーバードのライシャワー研究所を中心に、連携機関と作り上げられた「2011 年東日本大震災デジタルアーカイブ」(<http://jdarchive.org/>)などを、すぐにでもあげることができる。宗教学研究者としては、宗教者の活動を草の根的に網羅収集することを目指したものとして、宗教者災害救援ネットワーク(<http://www.facebook.com/FBNERJ>)、また、被災地で活動する宗教者を招いて情報共有の場を提供する宗教者災害支援連絡会(<http://www.indranet.jp/syuenren/>)などの活動も指摘しておきたい。
- (2) <http://www.japanlpg.or.jp/info/data/saigaisien.pdf>.
- (3) 以下で、IASC のアラビア語版ガイドラインをダウンロードして読むことができる。http://www.who.int/mental_health/emergencies/iasc_guidelines_arabic.pdf.
- (4) アルリヤド紙記事 <http://www.alriyadh.com/2012/02/13/article709408.html>.
- (5) 現代サウディ文化についての辻上氏へのインタビュー記事が、アルハヤート紙に掲載されている。<http://ksa.daralhayat.com/ksaarticle/357153>.

参考文献

朝日新聞中東マガジン (<http://astand.asahi.com/magazine/middleeast/report/list.html>)

※今回渡航の辻上奈美江氏だけでなく、福田安志氏、細田尚美氏、平野恵子氏

からの、生活文化面に即した、また移民労働者などサウジの労働事情を構成する担い手にも光を当てたレポートが掲載されている。有料。

アラブイスラーム学院ウェブサイト (<http://www.aii-t.org/index.htm>)

葛西賢太 2011 「国際文化祭の参加者としてみたサウジアラビア」宗教情報センターウェブサイト (<http://www.circam.jp/page.jsp?id=1751>)

葛西賢太 2011 「国際文化祭ジャナドリヤからみたサウジアラビア文化とイスラーム」『宗教と社会貢献』第1巻第2号(2011-10)
(http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/RSC/volume/rsc001_02.html)

外務省国別データブック サウジアラビア

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/09_databook/pdfs/04-08.pdf)

在サウジアラビア日本大使館ウェブサイト (<http://www.ksa.emb-japan.go.jp/j/>)

駐日サウジアラビア王国大使館ウェブサイト (<http://www.saudiembassy.or.jp/>)

森村安史 2012 「時評 サウジアラビアの精神科医療から学ぶもの」『日本精神科病院協会雑誌』4月号。